

谨呈

Guojihua/Shiye/Zhong/De  
Ribenxue/Yanjiu

东亚日本学国际研讨会论文集

# 国际化视野中的 日本学研究

——纪念胡振平教授从教45周年

主编 王铁桥 姚灯镇  
副主编 何建军 盛文忠

东亚日本学国际研讨会

主办单位：中国日语教学研究会  
洛阳外国语学院日本学研究中心  
承办单位：洛阳外国语学院日本学研究中心  
河南省高等院校日语教学研究会

后援单位（汉语拼音序）：

北京日本学研究中心  
高等教育出版社  
国际交流基金北京事务所  
河南省教育厅  
河南省高校外语教学委员会  
卡西欧（上海）贸易有限公司  
外语教学与研究出版社

日本国际交流研究所  
日本侨报社  
日中交流研究所

图书在版编目(CIP)数据

国际化视野中的日本学研究：纪念胡振平教授从教45周年 / 王铁桥, 姚灯镇主编. —天津：南开大学出版社, 2007.10

ISBN 978-7-310-02759-0

I. 国… I. ①王…②姚… III. 日本—研究—文集  
IV. K313.07-53

南开大学出版社  
天津

中国版本图书馆CIP数据核字(2007)第149334号

2007年10月第1版 2007年10月第1次印刷  
880×1230毫米 32开本 20.25印张 2插页 581千字  
定价：45.00元

2007.10.7c PP.638.

## 目 录

認知言語学と日本語教育	池上嘉彦	1
日本語研究と国立国語研究所	宮島達夫	14
双方向のマルチメディア日本語教材の可能性		
——日本の文化をどう伝えるか	佐々木瑞枝	21
ビジネスにおける日本語	日置弘一郎	26
JPSOC.NET システムのあらまし	伊津信之介	28

## 日語語言篇

中国語・日本語・朝鮮語の東アジア言語におけるある種の「音韻対応」(k・x-p)	安部清哉	31
類語辞書にみられる意味のとらえ方	陈 露	40
日語 广告の动态语境分析	董 冰	47
日語介在性表达和人类转喻认知方式	付红红	55
日本語の再帰使役文に関する一考察	傅 冰	63
中日“拒绝请求”方式的异同	贾 丽	72
中国語と日本語におけるオノマトペについて		
——翻訳の立場から	姜 辉	80
新しい文法カテゴリーとしての動作パーフェクトの～		
テイルとその教授法	井上ゆみ	89
「V-なくしてほしい」から間接発話行為を見る～李爱华 赵平	李爱华 赵平	97
依頼表現における附加表現の日中対照研究		
——大学生のアンケートに基づく分析	李 倩	106
認知语言学対日語词汇学习的启示	刘 俊	114
テ形接续与从句的构造	马兰英	123
逆接を表す接続助詞と接続詞の接点		
——「ところが」を中心に	马燕菁	133

以下略  
pp. 638

# 1 语言

## 中国語・日本語・朝鮮語の東アジア言語におけるある種の「音韻対応」(k・x-p)

日本学習院大学 安部清哉

要 旨: 本稿では、東アジア言語に見られるある種の音韻対応の傾向「k・x-p」について取り上げる。前半部分では、中国国内ではじめて紹介する主題でもあるので、その前提となる言語・文化的特徴に関する安部の既研究内容についての解説となっている。

キーワード: 日本語; 中国語; 朝鮮語; 音韻対応; k・x-p

### 0. はじめに——モンスーン・アジア領域と言語文化境界線

執筆者は、これまで、アジア・環太平洋の連続する広い領域に、Monsoon Asia という気候を背景にした言語的、また、文化的共通現象が認められることを指摘し(安部 2003.7 ほか。HP <http://geocities.jp/abeseiya2005/> 参照)、「Monsoon Asia Cultural Sphere, MA 文化圏」と名付けた(図1の範囲)。

その東アジア地域では、気候の寒冷・温暖の格差が、南北の言語(の方言)と文化とを2分している。その「南北(言語文化)境界線」は、日本列島の南北方言分布境界線(気候境界線)と、朝鮮半島の南北方言分布境界線であり、さらに、中国において既に知られている文化境界線である「秦嶺—淮河線 Qing-Ling=Huai-river=Line」がそれに該当する。そして、これらは、アジアの中央を東西に横に貫

く、一続きの文化境界線を形成しているので、「Monsoon Asia Central Climate Line M. A. 中央気候線」と名付けた(図1の大陸内部の境界線、および、図2の中央の境界線、参照)。

### 1. モンスーン・アジア領域の河川名・類別詞分布及び南北文化圏の音韻対応

アジアには、共通した言語現象と同語源の蓋然性が高い基礎語彙の分布が認められる。それは、特に河川名と類別詞 (Hydronymic System) に顕著である(詳しくは、安部2003.7, 安部2004.12, ABE2006, 河川名のI「ナリ」、II「サワ(沢)」、III「ヌマ(沼)」の語形分布はHP参照)。その類別詞の分布領域は、Monsoon Asia 気候(以下、MA気候)の領域と共通し、かつ、Frobenius1938が指摘する東洋の類型的語分分布の領域ともほぼ一致している(全10枚)。それは、アジアから環太平洋に及ぶ「アジア・環太平洋」の地域(図1)である。その領域の文化人類学的な共通性に着目し(ABE2006)、この領域を仮に「Monsoon Asia Cultural Sphere, MA文化圏」と名付けることにした。その中央にある上記境界線「モンスーン・アジア中央気候線」では、気候の「温暖-寒冷」によって、アジア南北における方言と文化が「アジア北方文化圏-アジア南方文化圏」に2分される。

注目されるのは、このMA文化圏の東アジア言語である日本語・中国語・朝鮮語において、それぞれの南北方言に、共通した、ある種の「音韻対応 (sound correspondence)」の傾向を指摘することができることである。それは、 $b \cdot p - m, d \cdot t - n, *g \cdot k \cdot x - *gw \cdot kw \cdot p \cdot f \cdot \Phi$  (それぞれ、横線一の左右が「北側-南側」の音声特徴)と示すことができる(下記Chart1参照)。この「音韻対応」の特徴は、概略、北方が破裂音 (plosive) 的傾向、南方が nasal (or labial) 的傾向での対立と把握することができる。本稿の目的は、この3種類の音韻対立の傾向のうちの1つ、「 $*g \cdot k \cdot x - *gw \cdot kw \cdot p \cdot f \cdot \Phi$ 」に関して、その一事例を簡略に報告するものである。

### 2. 音韻対応の一傾向

さて、気候境界線という同一の自然要因と地理的連続線によって、日本語・中国語・朝鮮語の3つの言語は、それぞれ南北の方言に区分されていることを指摘できる。それは、中国語の北京官話系方言-南方広東系方言、日本語の日本海側方言-太平洋側方言、朝鮮語の高句麗方言-新羅・百濟方言である(安部2005.5)。注目されるのは、この3言語の南北方言を対比すると、中国語・日本語・朝鮮語それぞれに南北方言の間に共通したある程度の「音韻対応」(Sound Correspondence)の傾向を指摘できることである。それは、 $Labial = [b \cdot p - m], Dental = [d \cdot t - n], *Labial Velar = [*g \cdot k \cdot x - *gw \cdot kw \cdot p \cdot f \cdot \Phi]$  (いづれも、北-南) という南北での相違である (Chart 1 参照)。(安部1999dで表を掲載。b-m対応については安部2005.5で取り上げ、本稿にその続編になる)。

Chart 1 On Sound Correspondence 'b/p-m, d/t-n, k/x-p (<\*pw>,' between North and South Dialects in East Asian Languages: Japanese, Chinese and Korean Languages.

East Asian Lang.	Bilabial	Alveolar	Labial / Labial (labial Velar)	Distinctive feature
North Dialect	b/p	d/t	*k/g (k,x) (x,[ʔ])	Plosive
South Dialect	m	n	p / #h (*#hw) (kw, kw/gu, gw), f, Φ, (note: #h=voiced h)	nasal or labial?

【概略、北方が破裂音 (plosive) 的傾向、南方が nasal か labial 的傾向で対立する。】

ここでは、「 $*g \cdot k \cdot X - *gw \cdot kw \cdot p \cdot f \cdot \Phi$ 」の例を取り上げ、紙幅の関係で地図を示して簡略に解説する。日本語・中国語・朝鮮語それぞれにおける南北方言語形を示すと、次の表2のようなもの

が指摘できる。

日本語 [kitu — pitu] (櫃, ヒツ), [suka · si — supa · si] (酸っぱい)

中国語「火」における [xwə · xua ~ f ~ p ~] (そのほかの語形における同様の南北での対応語形)

朝鮮語「城・忽(村落)」における [xul (hor) — puri (piri) / pul (pir)] の南北方言 (李崇寧ほか、『三国史記』のこの地名表記については先行研究多い。李芳漢 1983 では、高句麗語「[xuət] 忽」と解釈する)。

これらの方言音声の対応位置は、図 2 に示したように、気候境界線を境界とする南北での相違を示す (日本語の地図は省略、言語地図の「すっぱい」を参照されたい)。これらの語形と分布についての詳細な解説は、紙幅の関係で別稿に譲ることになるが、それぞれの分布からは、気候境界線の位置での南北での対立を確認することができる。

これらは、概ね、北の硬口蓋から喉音における発音と、南の唇音という対立で類型性があることがわかる。通常、音韻対応という場合、同一単語での対応に限定される。これらの事例はそのような意味での音韻対応とは言えないが、何らかの音声的共通背景をもつ対応現象と解釈できる。(同一単語における事例としては、地理的位置が明確でないが、次の「火」の子音の対応例が該当する事例と言えよう)。これらの単語での規則的音声的対応の傾向、しかも、共通した気候境界線の位置での南北対応は、偶然ではなく、一種の音韻対応事例と見なすことができよう。「音韻対応の傾向」と表現したのはそのためである (その要因の解釈は、別項にて検討していき)。それゆえ、ここでは、あくまで「ある種の音韻対応の傾向」として提示しておくこととする。

Chart 2 東アジア言語 (日本語・中国語・朝鮮語) における「\*g · k · X — \*gw · kw · p · f · Φ」

	North- <b>*g · k · x</b>	South- <b>*gw · kw · p · f</b>	意味 (meaning)
日本語	sukka (酸っぱい) kitsu (櫃)	suppa-i (酸っぱい) pitsu (櫃)	酸っぱい (sour) 櫃 (bucket made by wood)
朝鮮語	xul (hor)	Puri (piri) / pul (pir)	村落 (village)
中国語	xwar, xua, huo	fo, fei, pui (火, 火)	火 (fire)
日本漢字音	k (kwa, kw)	w (絵, 恵, 和, wa)	日本語の漢音 (北方) / 吳音 (南方)

なお、Chart 2 に示した事例では、[k · x · h — p · f · w] の例しかないが、それ以外の理論的な検討と、安部 2006, 3 の印欧語における東西の対応をも検討して、理論的に再構成したものとして、ここでは [\*g · k · x — \*gw · kw · p · f] を対応例として提示している (その解説も別項に譲る)。これらは、東アジアの言語の南北での音韻対応であると位置づけられる。このように、対立する地理的位置も同時に示した「音韻対応」の指摘は、初めてののものである。この指摘は、日本語・中国語・朝鮮語ばかりでなく、東アジア言語の研究にとつて重要である。なぜなら、この指摘によって、例えば以下の Chart 3 のように、これまで別語源とされてきた基礎語彙「火」の語源が、皆同一語源 (推定 \*pui) であることが証明可能となるからである。

Chart 3 MA 文化圏内の言語の「火」を表す語彙 [\*pui]

日本語 Japanese	[ hi < pi, po < *poi ]
中国語 Chinese	[ huo (xue · xua) < hua < *xwer 上古音 < *pue ]
アイヌ語 Ainu	[ apé < *apui < *'pui < *pui ]
朝鮮語 Korean	[ pul < pil ]
南島語 Austronesian	[ *apuy < *apui < *pui ]
(c.f. Proto Altaic )	[ *p ' ore ] ( fire, burn ) cf. Greenberg 2002, Eurasianic, (* par)

### 3. おわりに

2で指摘した「\*g・k・X—\*gw・kw・p・f・Φ」を含め、表1の音韻対応の指摘は、アジア言語史の解明にとって重要である。なぜなら、例えば、これまでまったく別語とされていた中国語の「火」(huo [xwə · xua])が、他のアジア言語と関連付けることが可能となり、はじめて、他のアジア言語の「火」と同源と見なす「理論的裏づけ」を与えることができるからである。

MA文化圏のような、極めて特異な広域の領域の指摘は、この一連の研究が世界的にも最初のものであるから、今後批判的検討が必要であることはもちろんである。しかし、MA文化圏は、人類史的に見ても、極めて興味深い領域であるということは、誰の目にもはや明白であろう。この領域の危機言語の調査など、貴重な研究データ収集を急ぐことを含め、今後、この領域を対象とした国際的学際的研究が盛んになることを期待したい。

#### 注釋:

①東北部は、気候が寒冷化していく関係で現象が希薄になり、Cline (地理的漸移勾配) をなすと解釈される。

#### 参考文献:

- (抄録。関連文献や地図は拙論やHP (<http://geocities.jp/abeseiya2005/>) 参照)
- [1] Greenberg, Joseph, H. 2002, *Indo-European and Its Closest Relatives*, Vol.2. Lexicon, Stanford Univ., Press, California, USA.
- [2] Hans Krahe (1954) 『SPRACHE UND VORZEIT』
- [3] W. B. Schostakowitsch, 1926, *Die historisch-ethnographische Bedeutung der Benennungen sibirischer Flüsse*, UJ6-1-2 (Ugarische Jahrbücher) (表紙印刷数字は1927)
- [4] 鏡味完二 『日本地名学』 東洋書林原書房 1958
- [5] 鈴木秀夫 「民族の移動と言語の分布」 『言語』 16-7 と氏の先行論文 1987
- [6] 宋 敏 『韓国語と日本語のあいだ』 草風館 1999
- [7] 都 守照 『百済語研究』 亜細亜文化社 1977

- [8] 朴 炳采 「古代三国の地名語彙攷 (副題略)」 『白山学報』 5, 1968
- [9] 李 基文 『韓国語の歴史』 大修館書店, 1975
- [10] 李 崇寧 『韓国方言史』 韓国文化史大系9、高天民族文化研究所出版部, 1967
- [11] 李 芳漢 『韓国語の系統』 三一書房, 1983
- [12] ABE, Seiya (2003.7.29) Dialectical/climatic features and distribution of terms for watercourses in Asian languages : the case of Japanese, Korean, and Chinese, *Papers of X V II International Congress of Linguists' in CD-ROM, Prague, CIL, 2003,*
- [13] あべせいや (2004.12) 「言語地理学と日本語とアジア・環太平洋言語史」 『日本語学』 23-15
- [14] 安部清哉 (2001.8) 「東アジア (日本語・韓国語・中国語) の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関」 『韓国日本學會 (KAJA) 第63回學術大會 Proceedings』
- [15] 安部清哉 (2001.11) 「東アジア (日本語・韓国語・中国語) の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関 配布地図・補論」 『玉藻』 37
- [16] 安部清哉 (2002.5) 「方言地理学から見た日本語の成立——第3の言語史モデル理論としての“Stratification Model”」 『方言地理学の課題』 明治書院
- [17] 安部清哉編 (2003.3) 『日本語の方言分布境界線 (関越線・気候線) による方言の重層性に関する基礎的研究』 平成13・14年度科学研究費成果報告書、私家版
- [18] 安部清哉 (2003.7) 「関東における日本語方言境界線から見た河川地形名の重層とその背景」 『国語学』 54-3
- [19] 安部清哉 (2004.7) 「地名と日本語——河川地形名の言語空間」 『国文学解釈と鑑賞』 69-7
- [20] 安部清哉 (2004.12) 「言語地理学とアジア・環太平洋言語史」 『日本語学』 23-15.
- [21] 安部清哉 (2005.5) 「日本語・朝鮮語の境界とモンソン・アジア文化圏——水源地形名 numa < \*nub (沼・泥) の「b—m」音韻対応」 『大韓日語日

文学会『日語日文学』26号

[22] 安部清哉 (2006. 3) 『アジアと日本列島における言語・文化境界線“気候線” (摂氏0度線) ——言語地理学と文化地理学から』『学習院大学文学部 研究年報』52, P39-90.

[23] ABE, Seiya, 2006, On the “Monsoon Asia Substratum” and Altaic Superstratum in East Asia: A Stratificational Approach to Geolinguistics, *Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache, Studia Iaponica Wolfgang Viereck emerito oblate, Deutcheland.LINCOM* [諏訪哲郎 (1988) 『西南中国納西族の農耕民性と牧畜民性』学習院大学研究叢書 16

[24]

1988  
図2 中国における「火」の方言分布 (諏訪哲郎より)、及び、

朝鮮半島の「X-P 南北対応」(夫里 pul = 「村落」) (左上図、李崇

寧 1967 より)

[24] 諏訪哲郎ノヤギヤ

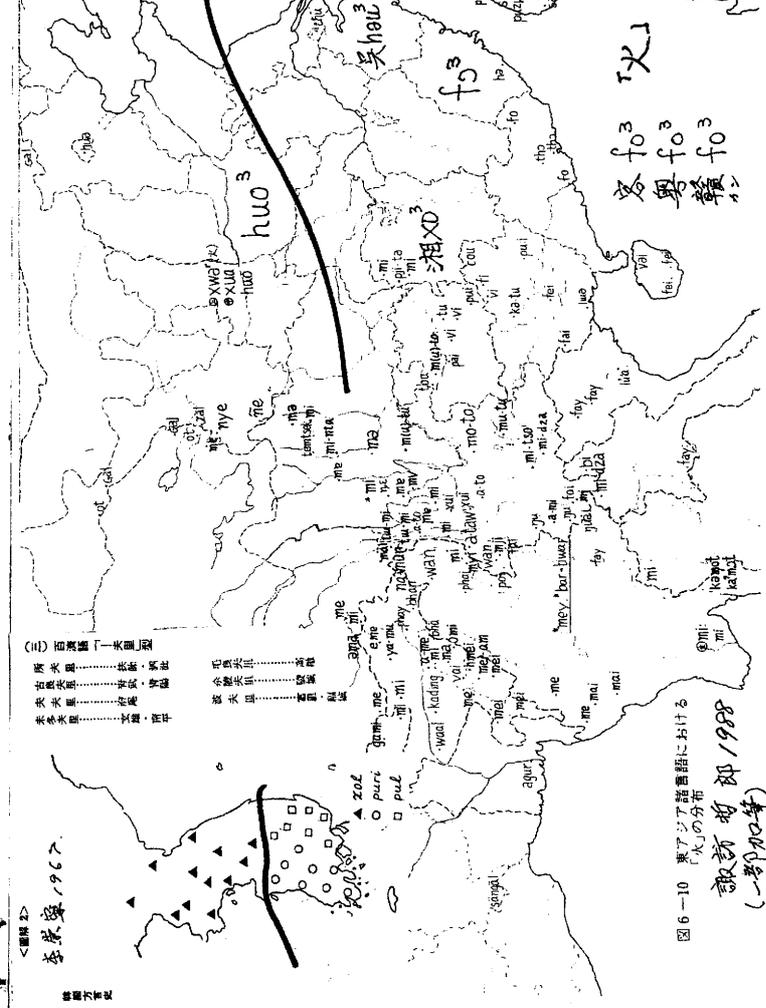
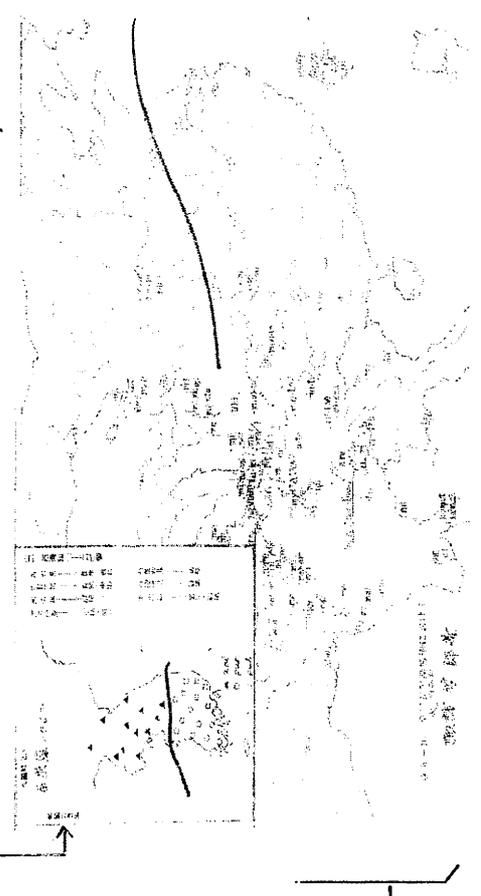


図6-10 東アジア諸言語における「火」の分布  
諏訪哲郎 1988  
(一部加筆)

図1 「Monsoon Asia Cultural Sphere, MA文化圏」

